



照井翠小論

想念の重量と熱量

山下知津子

『雪浄土』は『針の峰』『水恋宮』『翡翠楼』に続く照井翠の第四句集である。

櫻蘭へ続いてゐるたり五月間 『針の峰』

鬚気楼地下三階は古代都市 『水恋宮』

天の川ナイルの尽くるころより 『翡翠楼』

かつてこのように壮大なスケールの時空を自由に飛翔した照井翠の精神は、『雪浄土』においてもいっそう強靱に、真正面から渾々たる世界と向き合っている。

地の塩に天の霜置くサハラかな 『雪浄土』

密林を一気に剝がれ尽す蝶 " " " " " "

陽炎の人類の大地溝帯 " " " " " "

地の底に虹かかりけり大瀑布 " " " " " "

アフリカでのこれらの作品は、日頃私たちが数多く目にする俳句とはかなり趣を異にする。繊細で微妙な味わいを持ち、なごやかな親和力のある日本の自然を詠んだ

俳句とは異なり、ここに掲げた作品は、荒々しくむき出しの圧倒的なエネルギーを放つ廣大無辺の空間に身を置いての描写であり、表白である。作者はその空間に拮抗する烈しい生命力と分厚い精神力をもって対峙し、気魄に満ちて鮮烈にアフリカの大地を描き出している。この過程は作者が自分自身の原型や裸形の相を凝視し、追求してゆく時間でもある。アフリカという地に立って、人間存在の極小たることを、絶対的根源的な孤独を、嫺々と詠嘆するのではなく、冷徹に認識する翠の姿が見える。『雪浄土』のあとがきに「普遍的な世界(宇宙の真理や人間存在の本質)に到達できたなら、と念じております」と記されているが、これらの作品からは、存在の本質を追究しようとする垂直志向、形而上の世界への志向という、照井翠生来の資質が明確にうかがえる。〈地の底に〉の句には「ピクトリアの滝」の前書きが

滝にゐて滝響きをり滝になる
翠の内側に湛えられ蓄えられた人間存在探究へと向かう想念の重量と熱量が、ピクトリアという大瀑布と呼応し、止むに止まれぬ勢いとなって一気に噴き出している。こういう強烈な垂直志向と大きな熱量を秘めた本質探究には、西欧的な自我というものを思わせるものがある。翠のこのような資質と姿勢は、自身の暮らしの周辺を対象としたときも、際立って強い眼差しと深いところまで錘の垂れた思念を孕むものとなる。

焚火して蝦夷の貌に囲まるる 『針の峰』

蜘蛛は食へり獲物と交む形にて 『水恋宮』

割るる線うすうす見ゆる通草かな 『翡翠楼』

撃たれんと一頭の鹿澄みきりぬ " " " " " "

耀へる毒茸あり中尊寺 『雪浄土』

耕せり己に響くところまで " " " " " "

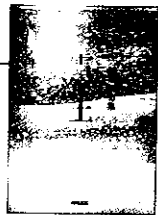
年重ねきし白鳥の白さかな " " " " " "

〈焚火して〉〈耀へる〉の句から立ち上がるのは、花巻市に生まれ、岩手県内にずっと在住する翠ならではの、鬱勃たる力に溢れた東北であり平泉である。〈蜘蛛は食へり〉や〈耕せり〉〈年重ねきし〉などの作品には、根源までつかみとって表現しようという烈しい魂が滲む。

そして、『雪浄土』第三章「鬱」としてここに不慮の事故による手術、リハビリ以降の、鬱傾向も強まって心身ともに苦しみの中にあつた時期の作品が並ぶ。地吹雪の吹きやむやうに死は来るか 『雪浄土』
夕桜鎖を垂らしつつ歩む " " " " " "
向日葵を剝げば号泣してをりぬ " " " " " "
明よりも滅ありがたき螢かな " " " " " "
暗々と乾ききる瀧曼珠沙華 " " " " " "

暗く重く鬱屈した感情が混沌と渦巻く作品群であるが、孕んでいるエネルギーはとてつもなく大きい。このエネルギーこそが翠の創作の源泉であろう。こういう時期の自分に全身全霊で向き合い、己の底から絞り出した言葉を五七五に定着させていった翠の生命力と意志力には驚異的なものがある。心身の状態がどん底にあつてもぎりぎりのところで延々と持ちこたえ、熱い美感のこもる自己表現としての俳句を積み上げて、翠は蘇生した。この体験を経てきたからこそ、一つの頂点として屹立するアフリカの作品群が生み出されたと言えよう。さらに、人間や宇宙の根源に迫っていく重厚で骨太でダイナミックな精神が陶冶されたのであろう。翠の師加藤楸邨はシルクロードを歩いた。その資質、その姿勢、照井翠は確かに楸邨を師と仰ぐ者である。

●『雪浄土』
自選20句抄



一輪の一切経の梅白し
雪浄土雀も仏なりしかな
支へあふ獄門の首寒暮光
天山の鷹蒼穹を絞りけり
この道を行けと沙漠を指されけり
オーロラのするする解かれゆく地球
蟻いつも掌を這つてをり蟻はるす
にぎはひのたんぼば葬をしてくれよ
コスモス散りなさい もう分かつたから
啄ばまれ柿さまさまに透けてをり

雪しんしんつうは羽根みを抜きたるか
帰りたし子猫のやうに唾へられ
地の塩に天の霜置くサハラかな
臘夜のをんなにひとつ紅珊瑚
たんぼぼが最も近き祈りの場
死ぬ朝の同心円のプルメリア
地果て海始まる脚たれも青
滝にゐて滝響きをり滝になる
銀嶺や賢治よ仰げ胸を張れ
年重ねきし白鳥の白さかな

一句鑑賞

両袖にちちははの首クリスマス

照井さんの第二句集『水恋宮』の印象を、シャンソンを聴いているようなと私は思った。流麗なりズム、洗練された作風。今回『雪浄土』を拝読して驚いた。シャンソンからファドになったような変異。東北は花巻の人ゆえ、照井さんの本質が強くなり出されてきたのか。「私は今、俳句をへ作る」時代から俳句をへ生む」時代へと踏み出しつつある」と仰るが、『雪浄土』には強烈な作句への意欲が感じられた。さわさわ音を立てて桑の葉を

食る蚕のように、命がけて言葉を食べり俳句に紡いでゆく深く誠実な意志。食欲な姿勢。全章に漲る迫力。異郷への「幻視行」、事故の後遺症に苦しむ「鬱とタンポポ」の章はファドどころかワグナーの楽劇の如くのつびきならぬ緊張が続き、一句を抜き出すと章が崩壊してしまふ。「雪浄土」の大籠(隠れキリシタン殉教の地)十八句はうち七句に「首」という文字を使っている。想念を、雪・寒・東の世界に閉じ込め獄門を追求する苦悶情熱。魅力的な一冊は章にとどめ、掲句に尽す。

富士真奈美

照井 翠句集『雪浄土』

小特集

俳句書
21世紀
角川

天上に容れられぬ雪なりしかな

天上に容れられぬ雪は天上を離れ地上を日差す。そしてまた地上にも容れられず溶けてゆくものも多い。ここには芸術家としての孤独の魂がある。芸術が他人の魂に響くことなく消え去ってゆくことの淋しさ、哀しさが背景にある。芸術における普遍と独創は相矛盾する関係にあるようだ。自分の言葉が他の人々に理解されてこそ、芸術はその一步を踏み出す。しかし共鳴、共感はず月並の一步でもある。普遍と月並の区別の難しさはそこにある。

一句鑑賞

この尿もいつか天山伏流水

『雪浄土』は「日本と異なる(風土)の中に身を置いて、より感覚を研ぎ澄まし、地霊との交感に努めて」きた句集と「あとがき」にある。師楸邨の『死の塔』などに競い立とうとする意気込みにまずは拍手を送りたい。海外旅行に無縁な私には、いわゆる海外詠の鑑賞には、つい手を拱いてしまうが、中では掲句。そのスケールの大きさが、地凶でしかたどったことのない大山脈のありようを彷彿させ魅力的だった。自分の体内から排出され

芸術家はあるときは誰にも理解されず、覚悟を吐ければいけないかも知れない。真の独創はそこから生まれる。その意味で共鳴共感に既に月並の一步との慮を持つことが必要である。容れられぬ雪の思いは作者の芸術家としての矜持であり、芸術家としての純粹の魂の存在を感じる。天上に容れられぬ雪という意外性ある発想によってこの句は読む者を一気に作者の世界に引き込む。作者は孤独の魂を雪と共有する事によって魂の活力を回復する。孤独の魂は孤独の世界で癒されるからである。

中村正幸

た、ほんの僅かな水が、万年雪を頂いた想像を絶する高さの山々の伏流水の一滴となり、いつかは吐魯番あたりの井戸水として戻ってくる。いわば、命を育む根源としての水そのものに感応している詩的エクスタシーが、この句にはある。女性の海外詠では、私は津田清子の沙漠の諸作が屈指と思っているが、ぜひ照井翠にも、氏にしか作り得ない海外詠を目指して欲しい。住まい近くにある、シルクロードの東の終着点平泉はそうした意味で、風土を地球的遠近法でとらえる最良の場であるのだから。

高野ムツオ

できること増えまし朝の辛夷かな

雪で転倒して腕を骨折した。そう聞いたのは何年前のことだったのだろう。雪国育ちで運動神経もよい照井さんのこと、その治療やりハビリがあんなに長引くとは、私達の誰も思わなかったし、日々の暮しに追われ、正直言ってその苦しみに思いを至らせることもあまりなかった。すっかり治癒したかに思えた頃、上京した照井さんの「顔を洗ったり、服を着たり……まだそんな当たり前のことをするのが大仕事」という言葉をきいて、凍り付

一句鑑賞

帰りたいし子猫のやりに唾へられ

『雪浄土』には、書名の通り、すぐれた雪の句がたくさん収められている。しかし、一句を挙げよといわれたら、この優しい句を私は選ぶだろう。

さる宅配便の会社のシンボルマークにもなっているように、猫は子を唾えて運ぶ（猫の首の後ろは、そうされても痛くない構造になっている）。母猫が子供を一匹ずつ唾えて運ぶ姿は必死であり、また威厳に満ちてもおり、見る者の胸を打つ。作者は、その親に運ばれてゆくへ子

たんぼぼが最も近き祈りの場

人間が選ぶ祈りの場にはどんなものがあるだろう。神社仏閣は言うに及ばず、滝や大河、森や湖などいくつか挙げてみる事ができる。どれも出掛けてゆく時間を考え合わせてみる必要がある。

一方たんぼぼに祈る作者にはそうした時間はない。しゃがみこんで、たんぼぼに声でもかければそれが命の祈りになるのである。この句が持つ雰囲気はリハビリテーションという言葉に置き換えられると思う。だがそれが

一句鑑賞

白鳥のシベリアの荷を解きをり

白鳥はシベリアから約四千キロを二週間で翔破して来た。ついにこの温暖な日本に着くと、飛行中の凜々しい体勢を改め、ふんわりとした小舟に変わる。翼を畳み、長旅の後の「清らかな疲れ」を見せてくれる。照井翠氏に他にも白鳥の名吟がある。例えば第一句集『針の峰』所収の「白鳥の白を限りに求愛す」。あるいは本句集では「年重ねきし白鳥の白さかな」などがある。ところで、世界中の伝説をみても、白鳥はやはり「越境とエロ

くような思いがした。それだけのことをするのに、小一時間もかかるのだ。他人事ではない、とはじめて思った。そうでなくても、年をとればさまざまな動作が困難になってゆくだろう。ましてや、怪我や病気は誰にでも、いつでもふいに降りかかってくるものだ。想像するの怖ろしいが、避けて通ることは出来ないのだ。

掲句は、辛iriハビリをこなし、長い長いトンネルの先に眩い光が見えてきた瞬間の句だろう。その光は辛夷の花の白さにも似ていただろう。心底美しい句だと思ふ。

石田郷子

猫のやりに「帰りたい」という。では、どこへ？ それは、苦痛や哀しみとは無縁のあたたかな場所、愛する人達に囲まれて安心して過ごせる場所なのだろう。あるいは、憂いとは無縁だった頃の自分自身に戻りたいのかもしれない。

この句の前後には、三年にわたる闘病とリハビリを詠んだ作品が並んでいる。そういった事情を考慮してもしなくても、この句の持つ切なさ、読者の胸を打つに違いない。

權未知子

本人のリハビリにとどまるようである。雪浄土の神は降りて来なかったことになる。しかし私はこの句に照井翠の一本の意識の木を見る。たんぼぼでありながら、その茎はもうすでに「木」であるような不思議を覚えるのである。

照井だけが凭れ掛かる「木」ではなく、読む者全てを救わんとする小さな木が雪浄土の上のうち立ったのだと思う。とても静かな「木」だが、いつかその周りにはいくつもの木が寄り添うのではなからうか。

依光正樹

ス」の象徴になっているようだ。上村くにこ氏（『白鳥のシンボリズム』、御茶の水書房、一九九〇）によれば、白鳥というシンボルは同時に「男性性の極み」（飛んでいる白鳥騎士）と「女性性の極み」（浮いている白鳥処女）を暗示し、最終的には「永遠の愛」死」をもたらず鳥とされているという。照井氏が『雪浄土』で目差した美学そのものといえるのではないか。彼女は各地の海外詠と東北の風土詠を交錯させながら、あの世とこの世、生と死、男性性と女性性が交わるような俳風を具現化した。

マブソン青眼